

《桜に寄す》ダウンロード版

ああ、ふるさとの春の想いは
さくらさくら と歌うころ
弥生の空は 見渡すかぎり 霞みか雲か 匂いぞ出する
(ハミング) 花に慕うとも いにしえのままに歌い
いざやいざや 見にゆかん

大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）は1935年11月8日に、邦人初となる自作自演と指揮による大演奏会をパリで開催した。会場となったサル・ガヴオーには、J. イベールや「フランス六人組」のA. オネゲルとD. ミヨー、「パリ楽派」と呼ばれたA. グレチヤノフやA. チェレプニンなど、大作曲家たちが来場。大澤は《交響曲第二番》や《ピアノ協奏曲第二番 ト短調》などを発表して喝采を浴び、留学のクライマックスとなる華麗なパリデビューを飾った。

《桜に寄す》はその演奏会に於いて、大澤指揮コンセール・パドゥルー管弦楽団とソプラノ独唱マリア・クレンコが初演した「管弦楽伴奏による日本語歌曲」である。大澤自身が書いた詩には《さくらさくら》が引用され、流麗なオーケストレーションが鳴り響く中、母音唱で歌が始まり、麗らかな春の雰囲気漂う。そのあふれ出る日本の美が、パリの聴衆を魅了した。

素朴な古謡が芸術歌曲に生まれ変わったこの作品は、日本人が誇りとすべき、大澤の代表作である。クレンコと新作を練習するために、大澤はピアノ伴奏版も作った。そのピアノ伴奏版に、スコアやパート譜を参照して校訂を行って「無料ダウンロード版」を作成した。今後の演奏や研究に、是非ご利用頂きたい。

なお、大澤は1930年のボストン留学以降、アルファベットによる自署を「Ozawa」と書いたため、生前から日本語での発音「おおさわ」とダブルスタンダード状態が生じていた。この「ダウンロード版」では手稿譜を尊重して、Ozawaをそのまま用いている。